

東啓治の西国伝道

東洋大学の漢学者たち(その6)

吉田公平

yoshida kouhei

東敬治は大正元年8月朔日に先人東澤潟の慰霊祭を故郷の岩国に挙行して以来、慰霊祭は毎年の行事となった。この慰霊祭を故郷で行うに当たり、東敬治は7月下旬に東京を出発して、途中旧識の道友に面晤して久闊を叙することが通例であった。下向は中央本線を経由することが多い。景色が幽邃であることが一つの理由であった。夏の最中の汽車旅行ということのためであろうか。帰路は山陽本線・東海道本線を経由することが多い。その折々に知人友人と邂逅することを前もって約束することがあつてのことが多い。東敬治が上京して縁あつて東洋大学に奉職するようになり、陽明学普及運動の拠点を東京に置いた。発行した機関誌は『王学雑誌』『陽明学』である。財政的基盤は購読会員が収める会費である。渋沢栄一や大倉喜八郎などの大口寄付者の援助は大きな支えであつたであろうが、普及運動が目的であるから、購読会費を納める普通会员の確保が急務となる。先人東澤潟先生の慰霊祭は実父東澤潟に対する単なる親孝行ではない。普通会员の維持、新会員の獲得が一つの目的であつたに違いない。『王学雑誌』にも『陽明学』にも会員名簿が掲載されているが、郷里である山口県の会員が最も多い。それは先人東澤潟先生の門人、それに澤潟の晩年に若先生東敬治の門人が多数現地で活躍しており、その縁故で彼らは普通会员になり機関誌発行の財政基盤を支えてのである。この東澤潟慰霊祭は機関誌維持のため

めには欠かすことのできない年中行事であったのである。中央本線沿い、山陽本線・東海道本線沿いの各所で途中下車して旧識の知人友人に邂逅するのも、思い出を語るためだけではない。陽明学普及運動の新機運を豊かにする契機を探索することも一つの目的であった。毎年八月朔日を中心に開催された先人東澤潟慰霊祭を中核にすえた東敬治の「遊踪略記」はこの後は「陽明学」に掲載されることになる。陽明学の普及運動、機関誌の購読会員の維持獲得が目的であるから、当地で請われれば講演なり講話なりを厭うこと無く、こまめに行っている。講演・講話が終われば、旅館に泊まることもあるが、主に縁の人の自宅に止宿するのが通例である。講演を依頼した現地の人々の謝礼という側面もあったろうが、その夕餉の宴席での学談が滋味豊かであったことが、両者の喜びでもあった。東敬治はこの道友たちと諍いを起こすということは稀であった。

この講演旅行にはもう一つの目的があった。あるいは成果と言っても良い。それは旅先で、日本における陽明学者たちになつわる基礎資料を収集することである。それは過去世代である先学の伝記・写本・文献を見いだすこともあるが、近い過去の先学たちとか、今は社会的活動はしていないが、幕末維新期に陽明学を基本にすえた思想と行動を実践した人々に直接にお会いするか、その縁の人にお会いしてお話しを伺うということが機縁になって、帰京後に関連資料を整理して「陽明学」に掲載するということにしている。いわば取材旅行でもあったのである。東敬治は明善学社の機関誌『王学雑誌』、陽明学会の機関誌『陽明学』の主筆であった。主筆を助ける人としてその折々に協力者は確かにいた。生田正庵などはその一人である。しかし、この機関誌『王学雑誌』『陽明学』は東敬治が発案して誕生し、東敬治の情熱が持続を可能にした。勢い、主筆である東敬治の存在が大きい。されば、東敬治は紙面を充実させるために普段の努力が強いられた。この先人東澤潟の慰霊祭も単なる慰霊祭ではなくして、東敬治にとっては組織の活性化を掛けた取材旅行でもあった。身体強健であつたればこそ

旅行であつた。

以下に「游踪略記」(『陽明学』83号。大正4年9月1日発行)を紹介して、本文の後に若干の解説を付け加えることにする。漢字は当用漢字に直した所がある。句読点を新たにした所がある。

昨年は予が山口県に開く第三回の澤潟大会に臨みたる序を以て鹿児島王学会の招に応じたる往来事跡は、當時録して本誌七十一号に登記して諸同志者に報告せしが、今年はまた其の第四回大会に臨むべきの期となりたるを以て、此度は豫しめ其の開設地よりは、少しも前進せざることとなし。而して徐々と其歸路を辿ることとなせり。即ち、

七月二十四日を以て東京を発し、道を中央線によることとなし、午後山梨県猿橋に着す。同志北條和樂氏の來迎を得て、夕刻より其地の小学校に於て地方有志諸氏の為めに一場の講話をなし、予は遂に其の北條氏の樓上に宿せり。

猿橋は日本三橋の一として、其名高く、極めて幽邃の勝地なるが、物徂徠峡中記行の著ありてより、一層世に知られることとなり、今猶當時徂徠の宿泊せし家も存して、徂徠及び田省吾則ち富春山人などの親筆を藏せり。北條氏は医を業として、而も殊に斯道に其志篤く、吾会に於ては、其が未だ陽明学会と改称せざる以前、明善学社時代よりの会員たり。而して猿橋はまた予が十餘年前、経宿の地に係る。今猿橋清冷の風光に浴て、都下の塵熱を忘れ、同氏に宿するは、餘情あり。今新に詩あり。其旧作とを併して左に録す。

溪水涓々夜響樓。忽然支枕闇生愁。但從塵事一麾我。不聽此声已幾秋。(旧作)

清風入座月明樓。消盡平生万斛愁。無復半肱引塵夢。滿溪空翠氣如秋。（新作）

翌二十五日。汽車夜に入りて尾張名古屋に達し、直ちに乗換、夜行を続けたるが、車中雜填鬱蒸、殆んど名状すべからず。京都に着すれば、東天已に曙光を催すも、下車、旅館に投じ、一睡を貪り、二十六日午後大阪に至り、同志山中馨氏を其菩提庵に訪ひ、遂に同氏に宿す。同志森下博氏の來会せるありて、僧空海の金字大幅及び惺窩先生の親筆を示さる。共に珍品に属す。また大塩中斎先生の山水幅を示さる。卒作なれども、また瀟洒俗ならず。上に題詩あり。

送客江亭風雨愁。応知玉笛古涼州。半酣不識青衫濕。吹斷蓬湖六月秋。

と。声調も餘程よく響くが、恐くは先生の自作には非るべし。而して其に後素戲墨と署す。予は是迄未だ中斎の画をよくせるを聞ざれば、疑ありしが、後某氏云ふ我中斎の画は他にても嘗て一見せることありと。然れば中斎の画筆はまた抛るあるに似たり。

二十七日。朝。将に出発せんとするに際し、紀州和歌山の老儒倉田何庵翁の予の宿所を知りて來訪せるあり。翁名は續、佐藤一齋門下にして、学陽明を宗とせるもの、天下独り此翁を存せるのみ。其の上京せる時には、翁は必ず夫の三島翁の廬と予の屏居とを訪はるるを常とす。今や年既に八十九にして、而も其の矍鑠強健、壯者を凌げり。予も其厚情に対し、誼黙止すべからず。帰路必らず翁の高栖を一訪すべきを約して別れたり。それより汽車に投じ、夜山口県岩国駅に着き、旅館に宿し、翌朝佐々木將軍を其麻里布邸に訪ふ。將軍名

は直、岩国出身中の驍將として、其名高く、嘗て予か最初上京当時の恩人なれば、予は特に之を訪問せしに、恰も沖原男爵以下、諸先輩の來会せるに邂逅し、予も幸に共に多年契濶の情を一席に叙するを得たり。

二十八日は猶岩国に宿し、二十九日午後始めて予が先人澤潟先生墓下の通津村に入れり。大会は八月一日を以て熊毛群平生村に開く筈なるがゆへ、予は通津村の墓下に二宿して、大会に先つ一日の所にて平生村に詣るの考へなりし。然るに通津青年会の有志諸氏は、他の二三の会をも繰合せ、予の着村を期して一会を催する事あるがため、予も遂に臨時一宿を増し、三十一日は猶通津村に在て、青年会の催せる会場に臨めり。講話など了りて後は、丁度晩刻に近く、其れより予は諸氏に誘れて通津村の津口より船を泛へ、船には先づ満艦飾とは云はれぬも、提燈などを盛に吊し、生魚を蓄へたる所謂いけす船を其船尾に引きながら、夕風に吹かれ、徐々に転んじて、即ち吾先人旧年開塾の遺跡たる澤潟山の下に向へり。魚既に新鮮にして酒亦悪しからず。興漸く酣にして吟声頻りに動く。予も偶々一絶を得て朗吟せり。

澤潟山高映碧波。当年弦誦感慨多。至今松影海光裏。猶有旧人垂淚過。

此景此情共に千古に足る。到底彼の隅田川舟遊の比すべきに非らず。既にして船の山下に泊するや、皆船頭に立ち、嘗て其の塾舎講堂在所の遺跡を指点し、一樹一石も皆吾記憶を留めて多少の旧事を談ぜざるはなし。徘徊眷恋して暫らくは離れ去る能はざりしが、再び船を中流に放ち、旧を談じ新を語り、涙酒間に落つ。

八月一日は即ち澤潟大会の当日なるを以て、早朝由宇駅より汽車。柳井駅に下り、腕車平生村に入り、一先づ予が親戚且つ会員なる伴氏に休憩して後、始て会場に至る。会場は平生町立習成小学校に於てし、午後一時

の開会とす。平生は汽車線路を稍離れたる頗ぶる不便なる地点にも拘らず、集会頗ぶる盛況を呈したるは、幹事並に同志の熱誠によること明なり。定刻に至れば、幹事門司氏は先づ立て開会の挨拶をなし、一同先人澤湯先生肖像に礼拝を了り、それより京都より特に來会せる曾田文甫氏、前代議士国光五郎氏、幹事長裕俊聰氏及び予などの講演（筆記は後に出す）。例の如く画家小川清處氏、武内法山氏などの揮毫あり。尚別室に幹事会を開き諸務を協議し、毎年大坂より來会せる篤志会員巽健雄氏の逝去せるにより会中より香料を遣す事となせり。（曾田氏に托して転達す）。かくして式場をば一先つ引揚げ、午後六時より席を同町万安樓に移して懇親会を開き、共に十二分の歡を尽して、夜十時に散したるが、予は伴氏に宿せり。

翌二日。曾田静庵即ち文甫氏に誘はれて平生村の風物を一覽すべく、同行白銀若水・松村大夢・伴青山合して五人。先づ清岸寺に過ぐ。草菴あり。菴主竹翠発句二首を賦して座に出せり。

もれ聞くに、咄しすすしき薫る風。筆の跡、残してほしき、蟬の庵。

於是、俄に紙を展べ墨を磨る事となる。時に蟬声樹に満るも、庵中頗ふる風ありて稍涼し。

主人旧相識。闖入領幽叢。不管滿天熱。嗒然話涼風。（静庵作）

小亭対座意融々。不管斜陽懸樹紅。忘却晝間無限暑。乱蟬声裡引清風。（正堂作）

曾田氏の旧宅に至りて饗応を受けたるが、曾田氏又詩あり。

家無先父在。吟友亦登仙。高人何以慰。指顧設山川。

鞠浦より將に舟を放たんとするに、風ありて舟遊に適せざれば、遂に前岸蝦洲に渡りて小樓に飲む。また各々詩歌あり。夜に入りて共に歸路に就く。予は猶伴氏に帰れり。

江山迎我笑。況又伴同遊。遡洄欲避暑。更上蝦洲樓。（曾田静庵）

相携尋涼去。忘歸上水樓。炊烟凝不散。冷々氣如秋。（松村大夢）

偶会道交友。來登西岸樓。消暑欲無限。一日是千秋。（白銀若水）

移舟興未盡。又上水邊樓。日落渚烟遠。冷然六月秋。（正堂）

あなうれし、へたてぬ中の、すすしさに、まりふの浦の夕暮を見て。（大夢）

かへるさを、わすれはてける、まりふらう、あまりすすしき、風のかよへは。（伴青山）

ゆうつく日、波にをさめし、まりふらう、夏のなかはに、秋そかよへる。（同人）

四日。伴氏を辞して、再び通津村に入る。是れは通津郷村灘村大字保津に於て、玖珂郡長松浦誠氏の意に基き、知人大多和久吉氏の口入を以て、予に其の恰も開催せる臨海教授の会場に出席講話を乞ふあるによる。保津は即ち旧年澤潟塾開設の地点にして、予の此地に一場の講説をなすは、予の極めて悦ぶ所なれば、茲に再び其の近地に宿をとりたるものなり。

翌五日。定刻となれば、臨海教授を受くる生徒は言迄もなく、其他村中農民なども集りて、其間には予も旧時より相識るものも頗ぶる多く、於是予は起立し、手を挙て面前直ちに見る澤潟山を指して曰く、今諸君の中

に記憶猶新なるものも多かるべきが、實に吾先人澤瀉先生の遺跡は即ち彼れである。予が居を東京に移して以來は、絃誦の声絶へて、当所は漸次淒涼の景となるかのようなれども、予は敢て其の荒廢を悲まざるも、且つは時勢の変遷に鑑み、書を山間の一隅に講ずるは、道を天下に推明するに若かずと思ふの微衷に外ならざるも、如何せん志餘りあつて才足らず。やつとのことで一箇陽明学会を設け、月刊雜誌を維持しおる計りにて、未だ何等の効果も世に顯すことの能はぬは、鄉村父老諸人に対して面目なき心地もすれども、人は各々其境遇相応の處に隨うて道を行はねばならない。所謂道は人道なれば、誰人も皆書を読んで學者とはならなくともよい。百姓なれば百姓、町人なれば町人、各々其職業を励む所に人道はある。先人澤瀉先生の道もまたそれである。唯是先生は当時維新の時に際せるが故に、其の行事が斯様な訳になりておるのである。と因て猶懇々先人事跡などに就きて述る所ありし。講話了りて、鶏を殺し鮮を撃ち、皆諸同志の手料理によりて、一杯を傾けたるも、亦一興なり。雨偶々至るも、早魃の揚句、雨を得、暑熱を一洗し、吾等農民と共に悦び合へり。

六日。朝。岩国町に至れば、岩国四派青年会在郷軍人会の協同發起にて、夕刻八時より其地西福寺に會して、予に一席の講話を乞ふこととなれり。七日午後三時よりは郡長松浦氏の請求に応じ、其の恰も其地小学校に於て開催せる教育講習会の開会第一席の講話をなせり。其要旨は無論陽明学と先人澤瀉先生との談にして、大略は其が曩に保津に於て述べたるものを一層広く且つ精く説きたる迄に過ぎざりし。但箇様数回の講話により、予の正に当所に在ること知れ渡り、旧知人の伝聞して集るもの多く、更に米谷養之助氏山田龍氏などの私宅にも招かれ、旧知人山近靖之氏などの如きは、特に福岡県より來會せるあり。偶々郷の先輩藤田竹癡翁は、予か澤瀉山下の前作に次韻して、予に賜はる。翁は方に八十歳。實に予先人執友の一なり。其詩は左に。

唯看滔々縱奔波。一世能支奈不多。渾是父公道德地。靈光再發又經過。

予は箇様郷里諸氏優渥の歡情をやうやうに辞して、八日午後始めて汽車。呉市に至れば、已に夜。因て一先づ旅館に宿し、翌九日朝。山中久太郎氏を其の和庄町に訪問す。同氏は矢張旧澤潟塾生にして、今年珍敷予が東京の寓居を來訪せるより、予も大に旧情を催し、此度特に呉市に立寄べきを約せるによる。是より予は遂に同氏に信宿せり。其詩に云ふ。

迂路冒残暑。來尋故友居。談酣連晝夜。情厚略親疎。

鯉躍曲池裡。蟬噪過雨餘。豈思一朝潤。忽作卅年初。

と。猶予は山中氏席上にて、伊藤鷺城氏に邂逅す。同氏は詩を善くし、嘗て予知友高瀬惺軒氏と支那に在つて共に廬山行をなせしと云ふ。今広島に在つて詩社を結び、時々呉市にも來りて詩を講せり。

呉市はだれも知る通り、新設の一軍港なるが、予は始めて其地に至り、大に其の繁盛に驚きたり。彷彿として彼の銀座街道を見るが如き感をなせり。十二日は朝より予は同氏に誘れて、舟を港外に漕ぎ出し、顧みて呉港全体の形勝を望みたるに、幾多軍艦の出入せるものが、自然の山川と相映帶する狀見れば、吾等老措大をして覚へず脾肉の感に堪へざらしむ。遂に進んで音戸の所謂平公塔の下に至りたるが、偶々小作あり。

山圍港外周遭橫。形勝宛然庄海瀛。回首慚吾空載酒。平公塔下趣晴行。

是より舟を転んじ釣艇のものより鮮鱗を賒りなどして、嶋嶼の間を縫ふて、あるは舟を一海浜に寄せて海浴を

試みなどして帰れば、丁度一日の光陰を費せり。夜に入れば其の市の集会所に於て一席の講話をなしたるに、会衆頗ぶる多く、市内紳士上流の人は、大抵皆之に來会せり。其状勢にみれば、自然に火燃泉達の模様もありて、当地は後來大に吾会に一層多くの同志者を得るに至ることあるべし。

十三日。朝。呉市を免し、午後備中笠岡駅に下車し、直ちに腕車を駆りて、其の隣村金浦字西浜に久我於菟一郎氏を訪ふものは、蓋し此の西浜には久我氏の先代房吉翁が嘗て其父翁と共に松田吞舟先生を迎へて一時開塾なしたる事ありて、予はまた其松田先生とは深き因縁あるによる。抑も此の先生と云は、長州故の楫取素彦男爵の実弟にして、夙に文を安積良齋先生に學びて名あり。其の人となり、磊落不羈にして、交際する所は、皆一時の俊傑なり。嘗て志を齎し、鬱々として將に其地に赴かんとせる時、來りて予が先人を澤潟山下に訪ひ、別を告げしかば、先人一序文を製し之に贈り、又予をして先生に一文を呈せしめしが、時に予年甫めて十三。文中に先生幸以某幼勿不信其言。昔項橐七歳而為孔子之師。云々の語ありければ、先生大に驚きて盛に其文を嘆賞せし（其文は評を併せて今之を予の著心券卷中に収む）ことあり。かかる縁故を以て後、予が漫遊の途次、特に先生を此の西浜に訪問せしことあり。時に予は猶十七八歳計りの少年なりし。當時僅一二宿にして去りしものなれども、予の西浜に於る情ならず。而して久我氏はまた其先代よりの關係より、蓋し予の嘗て松田先生の眷顧を得しものなるを聞けるか。頻りに其意を伝へて、予の往訪を待つものの如き。已に三年前よりの事なれば、今幸に機会の到來に乗じ、遂に其一訪を決したるものなり。

二三の旧人も亦会し、共に往昔を談じなどして、遂に同氏に一宿す。席上一詩を録して之に贈る。

回首昔遊一夢殘。算來歲月亦何寬。交歡相遇深緣在。始覺旧盟猶未寒。

此は昨年山田濟齋氏の予に贈る所の詩意を盗用して、少し手際がまづい。必らず同氏の一笑を買ことならんか。

十四日。午刻より久我氏を辞し、笠岡駅よりまに汽車に投じ去らんとせるに、笠岡某寺中（寺名を忘る）には津田白印師ありて、孤児院を其境内に設け、専ら慈善事業に従事し、学識もあり畫を善し、弟子の書を学ぶもの百餘人もありときき、試に其門を叩きて刺を通じたるに、其室に一宿することとなり、櫛を飛し衆を集め、直ちに其夜を以て、予に一場の講話を請はる。其境の不便なるに拘らず、活動周旋の敏捷なるも、亦意外なり。寓僧に三浦玉振師あり。夢梅と号し、また畫を善くす。院規として毎早食前幼児に簡單なる經文を授く。僅に二三句のみ、素読熟して平易の講授をなす。此は玉振師の担任なるが如し。予平生幼児は蚤くより聖賢の格言を暗誦せしめおくの要あるを説くも、聞者或に迂として省みざりしが、今此狀を見て大に慰む。

十五日。朝。汽車に投じ、大阪に至れば、日猶高し。因て電車に乗り換へ、泉州堺町に至り、それより腕車を雇ひ行く一里餘。泉北群深井村外山忠三郎氏を訪ふ。同氏は偶々家に在らず。予が定めて此日を以て至るべきを聞き、急に歸りたるが、丁度予が其家に至りし時に逢へり。先是大坂天王寺近所に老儒田結庄千里先生といふあり。俗名齋治。予も往年一謁を得たることあり。曾て吾先人澤潟翁の證心録に序文を製せし事ありて、今猶存せり。而して外山氏はまた其高弟子たり。千里先生は夙に学を大塩中齋に授り、また西洋砲術を高嶋秋帆に授り、疾くより清国にも遊び、世事に奔走せしことあるも、晩年専ら繪畫を樂み、平生論学の書より絵事の説に至る迄、著述頗ぶる多く、学徳老成にして、風尚高潔の大儒なりし。聞けば洗心洞割記の校字者として姓名を列せる中に但馬守約とあるは、即ち先生の事にて、割記版下も大抵先生の手に成りしと云ふも、後來姓

名共に變り、殊に晩年は自ら韜晦して多くは學を談ぜざりしがため、世の識らざるものは、徒に先生を一箇風流畫家とのみ思へり。千里先生の傳は追て雜誌に表彰するの時あるべきも、兎角箇様の訳柄を以て、予は平生千里先生を敬慕する所より、此行は帰路必らず外山氏を尋ぬべきを約したるものなり。

外山氏はまた藏書に富み、珍籍頗ぶる多し。近日高価購入せし中齋本明儒學按を見るに、批評の所は僅少なるも、朱圈星の如く燦然として往々紙に滿つ。而して其最も珍籍なるものは、明代の大儒鹿忠節の親筆批評入羅文恭先生集是なり。表紙に忠節夫子批とあるは、其門人の書か。而して其次に旧來の故びたる表紙を保存する所ありて、羅念菴文集と題せり。即ちまた鹿忠節の親筆なるに似たり。試に評入の数を調べたるに、凡そ七十五所あり。而して落丁書統の紙もまた三ヶ所あり。凡そ八冊十三卷。嘉靖癸亥夏四月同年友滁陽胡松序とあり、跋文なし。忠節名は善繼、字は伯順、乾嶽と号し、國難に殉じ、忠節と諡す。念菴は陽明門下の高弟にして、忠節其時を距る遠からず。亦陽明子に私淑せるもの。忠節の親筆批本に係る羅念菴文集と思へば、実に稀有の宝物なり。外山氏は更に鹿忠節公集をも所持す。六冊二十一卷。茅元儀の序あり。元儀武備志を著し、兵學を以て名あり。亦佳本なり。次は陽明先生の古本大學傍釈の三本を合して契せるもの。蓋し千里先生の遺物なり。其の一は李氏涵海中に刊行せるものを外して單行本とせるもの、旁訓と名づく。聞けば中齋先生曾て大學旁訓のほしさに特に李氏涵海を買入れて、旁訓のみを外したりと。是本は蓋し其遺物にして中齋の親く之を千里先生に授けたるにはあらざるか。其二は千里先生親筆寫本にして、百陵學山中に載する所の別本にして、旁註と名づく。其三は通常和版古本大學の白文にして、旁釈なきものに就きて、亦千里先生の親ら旁訓旁註の二本の釈を朱墨二筆に分けて書入たるものにして、而して先生は又記して曰く、

此旁註者百陵學山中所載也。校訂以李氏涵海中之傍訓。而涵海之本字不足。

と。猶外山氏は頗ぶる多く千里先生の書画幅を藏せるが、先生は独り草書も善くするのみならず。古篆も亦巧みにて、篆刻も善くせりと云ふ。而して其画筆に至つては、山水花卉動物妙に入らざるはなく、恍惚として清初諸名家の作を見るが如く、用墨博色一々に皆法式ありて、決して学者先生の餘戯に出でたるものとはなすべからずして、本邦近世中に強て其伍を求めば、竹田・崋山の徒が纔に其議論を上下すべきものにして、其他諸人は皆後に瞠着たらん。宜なり世の先生を書家と思ふや、先生は寧ろ其絶技のために却て其聖学に於ける真精神を世に知らぬこととなりしものなり。吾党畫に志すものは、是非一訪して、其真蹟を觀て興起するの要あるべし。

十七日。予は外山氏と共に和歌山に至り、倉田先生の栖居を訪ひ、且つ外山氏と共に誘はれて和歌の浦の名勝を縦覧し、午後また先生と共に同市商業會議所頭取たる垂井清右衛門氏に其旅籠町の邸に招かれたるが、酒間揮毫の興あり。予竹を作る。先生和歌の題あり。主人垂井氏も発句を作る。而して予は遂に同氏に宿したるが、今其作共に左に録す。

霜雪を、しのきて高く、延はへゆく、直くなる竹に、ならへ世のひとつ。(何庵先生)
罪もなき、はなしにふけて、月の友。(垂井主人)

十八日。予は和歌山より汽車京都に至り、東山禅林寺(即ち永観堂)に近藤亮嚴師を訪ふ。師は固より其宗派の管長として、近年は殊に其殿堂を増修に尽瘁し、煥然たる莊嚴、大に其旧觀を改め、衆徒の渴仰する所となる。而して師はまた嘗て儒学を春日潜菴先生に授りたることありて、予と相識ること久しければ、先づ其居

を訪へり。對話の後、予は更に去つて高瀬博士を下鴨に訪ふ。予の博士とは博士帰朝以来始ての対談となす。欧州戦乱当時の模様より独英文明の状態などをきき、新談頗ぶるおとし。高話夜に入るも、予は再び禪林寺の僧坊に歸つて宿せり。

十九日。朝。予は嘗て石田梅巖の学は全く其所謂了雲老師と称せる人の啓発に得るものにして、了雲老師の伝明かならざるを遺憾となし居れば、其の了雲の墓は、現に京都四條寺町永養寺の境内に在るとききたれば、特に尋ねて展拝せしものなるが、蓋し心学末徒の來拝するもの、今に絶えざる様子にて、墓域淨く掃ひて、一茎草をだも止めざるには、梅巖先生心学唱導の餘沢已まざるに感じたり。碑面にはただ了雲老師之壙とのみ題し、碑陰には享保十四龍飛己酉十月十九日寂小徒等謹立と書し、而して其台石に近江屋武兵衛とあるが、其武兵衛とあるものの、意味分らず。過去帳を見るに、別に何等の事をも知るべきなし。聞けば東洞院五條北へ入る西側酒屋吉岡宇平と云へるものの老母が了雲命日には必らず参拝することにて、定めて心学末徒の一人なれば、之に尋ねれば、何かの分ることあるべきとの事なれども、予は其時間を得ずしてやみたれば、是は京都同志者の追うて猶調査報告あるを乞ふ。次で故伊藤仁齋先生の旧宅を堀川に訪ふて伊藤顧也と云へる人に面会せり。蓋し現今主人は猶ほ幼年にして、其顧也翁は即ち東涯先生の次弟梅宇先生の後胤にして、歴代福山藩に仕へ來りしものなるが、今は其の宗家後見の意味にて、特に來りて同居せるものなり。屋敷地は全く其の故地其儘の住居にして、家屋は一二罹災の変を経たるも、書庫の二棟は幸に其難を免かる。此を以て其遺筆遺稿の如きものも、大抵はよく保存して、論孟古義童子問などの如き、苟も其藏版に係るものをば、皆巖然其版木一枚をも失はずして所藏せり。而して其が東涯先生以後、歴代好学の子孫を繼續して、爾來殆んど二百餘年にも近からんとする。明治時代に至る迄も、猶学を其家塾に講じ居りしと聞くに及んで、予は覺へず爽然と

して自失し、嘆じて曰く、有是哉、有是哉。茲に以て益々彼の仁斎東涯両先生の盛徳至善が如何によく其後人を感化することの偉大なるかを察すべしと。種々晷を移したれば、急に辞して、再び禅林寺の寓居に帰り、午後四時の汽車に投じ、夜十二時豊橋駅に至り、旅館に宿したるが、車中猶内心頻りに前賢遺徳の及ぶ可からざるを感じ、吾等精神の足らざるを悲しみ、偶々一詩を得たれば、後追ふて之を伊藤氏に郵送せり。

訪伊藤仁斎先生旧居有感。呈顧也先生。

門前猶見堀川景。及聴遺風益慨然。家世讀書鮮於古。況君伝業留餘年。

二十日。朝。豊橋を立て、汽車三島駅に達すれば、午後一時頃なり。三島には帰路立寄べきの約あるを以て、豊橋より電報先づ意を通じおきたる事もあれば、汽車を下り、腕車市街を過ぎて、知人渡辺惣作氏の宅を尋ねんとするに、忽ち同氏の某病院より出るに逢ふ。畢竟同氏は数日前毒蟲に喰はれて入院治療なし居たるに、予の至るを知りて暫く退院家に歸りて、予を迎んとせるものなり。予は導かれて其宅に赴きたるが、心甚安からず。急に辞去んとせば、同氏の懇留に逢ひ、また夜中の帰京も不便多く、其間に知人矢田部氏（前号に出せる執齋後人）も亦会し、談話深更に入り、遂に一宿を煩せり。而して其翌日二十日（二十一日の誤植）午後一時を以て無恙帰着せるが、座席未だ定らざるに、文書山積して、客中の疲労未だ除かず。因て爾来猶門外に出でざるが、遊中の情況は聞かんと欲するもの多かるべければ、聊か筆を舌に代へて以て吾一々応答の煩を省く。辞句を修飾するの遑もなく、脱略もまた多し。読者諸君願くは幸に之を恕せよ。大正四年八月二十五日記す。

今、詳細な注解をするゆとりがないので、気がついたことをのみ、本文の叙述の順序に従って、書き記して置くことにしたい。

一。物徂徠。本名は荻生徂徠。1666-1728。寛文6年-享保13年。

二。大塩中斎。本名は大塩平八郎。1793-1837。寛政5年-天保8年。この山水幅については、『陽明学』86号掲載。

三。倉田何庵。和歌山の人。東敬治の『陽明学』にも石崎東國の『陽明』にもしばしば登場する。神官ながら陽明学運動に熱心であった。とくに石崎東國が主催し、高瀬武次郎が協賛した「大坂陽明学会」の定期講演会には九十歳の高齢を物ともせず、毎回和歌山から駆けつけられた。『和歌山県史・人物』（平成元年。和歌山県）には以下のように記してある。「倉田績（くらたつむぐ）。1827-1910。漢学者。以成・何庵・袖岡・允齋。伊勢下野莊村（現嬉野町）で伊勢神宮神官の子に生まれる。漢学を久居藩佐野金平に学び嘉永2年（1849）2月和歌山に出る。のち江戸に遊学、佐藤一齋の門に入る。安政5年（1859）和歌山に戻り中ノ店に家塾貫塾（清風書院）を開く。明治6年（1873）和歌山水門吹上神社宮司。歌・禅・能楽にも堪能だったという。大正8年4月2日没。（田中敬忠『倉田績小伝』）。田中敬忠氏は地元の郷土史家とのこと。以上は吉田隆英氏の御示教による。厚く感謝します。倉田績が陽明学運動に荷担していたことはあまり注目されていないのかもしれない。倉田何庵については機会を改めて考察したい。

四。三島翁。三島中洲のこと。山田方谷の門人。二松学舎を創設した。

五。7月31日の通津村青年会。この時の講演については「澤潟先生に就きて」（通津青年会演説筆記） 裕俊聡。『其二』正堂。として『陽明学』84号3-9頁。大正4年10月1日発行。に掲載されている。

六。曾田文甫。曾田静庵のこと。倉田何庵と並んでこの当時の熱心な陽明学信奉者。

七。8月1日の澤湯大会。この時の演説は「澤湯会第四回大会演説の一。曾田静庵（文責記者）」「其二。国光五郎（文責記者）」「其三。裕俊聡（文責記者）」「其四。東正堂」『陽明学』85号1-11頁。大正4年11月1日発行。に掲載されている。

八。8月15日の田結庄千里。田結庄千里は大塩平八郎の門人。砲術を高嶋秋帆に学ぶ。大塩平八郎の『洗心洞剖記』の校訂者である但馬守約とは田結庄千里のこと。東澤湯の『證心録』の序文を執筆。この田結庄千里は大塩平八郎学派を理解する上では鍵を握る人物ながら、いまだ本格的には研究されていない。田結庄千里の高弟であった外山忠三郎に面晤したことが機縁に成って東敬治は田結庄千里について調査した成果を「田結庄千里翁の学に就きて」としてまとめて『陽明学』86号1-4頁。大正4年12月1日発行に掲載されている。そのなかには「證心録序。千里翁遺文」「洗心洞逸事。外山忠三郎」を含む。又、同号10-11頁に「田結庄千里翁伝（原寛文）。土屋鳳洲」を掲載されている。

外山忠三郎は蔵書豊富であったようである。その中で中斎手沢本『明儒学按』があった。大塩平八郎は所謂乱を起こした時に軍資金にするために蔵書を売却した。それを外山忠三郎は購入したという。小生はかつて九州大学に奉職していた折りに大塩平八郎の書き入れのある『伝習録』を披見したことがある。東敬治が大坂を訪れたその当時には大塩平八郎の手沢本を入手する機会がまだあった訳である。

また鹿忠節の親筆批評入り『羅文恭先生』をも所蔵していた。この一文には明記されていないが、これも大塩平八郎の手沢本であったのではないか。その当時、羅念菴の文集は稀有の宝物であり、その当時、閲読する人が少なかったであろう。そのこともあって大塩平八郎は『洗心洞剖記』の中で、羅念菴の文集を閲読しえたことを

誇りにして自己顕示している所があるからである。

更に王陽明の『古本大学旁釈』について言及していることは興味深い。王陽明は『古本大学』に注釈を加えたこと、その注釈を三たび改めたことを言及している。それは彼の別集である『王文成功全書』には収録されていない。それを収録している一つが『涵海』であり、もう一つは『百陵学山』である。その二つを校訂して第三のものを大塩平八郎は作成した。その自筆本は朱墨の二筆で書き分けたという。とすると東北大学図書館が所蔵する狩野文庫に所収されている、朱墨二筆で書き込まれている旁釈は大塩平八郎のものか、あるいはその伝写であろうか。

田結庄千里は大塩平八郎に師事しながらも生きのびて、明治時代になってからは、書画家鑑定家として過ごしたようである。世に身を隠す所為であったか。この方面における所業を東正堂はこの外に高く評価している。田結庄千里の本領は今後解明されることが期待される特異な儒学者文人である。

九。8月18日の石田梅巖。1685-1744（貞享2-延享1）。石門心学の開祖。江戸時代はもとより明治大正期におよんでも、この石門心学は結社を基盤に普及活動は熱心に行われていた。されば石田梅巖のみならず手島堵庵などもその関係資料が『陽明学』に掲載されている。東敬治は陽明学を狭く限定しないで、最大限に博く解釈して、援軍になる資源を持ち合わせている者は、たとえば楠本碩水のように朱子学者と見なされる人物をも所謂陽明学陣営に取り込んで、積極的に掲載した。

十。8月19日の伊藤仁斎。1627-1705（寛永4-宝永2）。伊藤仁斎の家学がその長子伊藤東涯に継承されて東敬治のこの時代まで維持されていたことを証言する一つの資料である。古義堂文庫の関係資料は、刊本はもとより、自筆稿本の類が今は天理図書館に収蔵されている。